



TITLE:

<批評・紹介>先秦經濟思想史論  
穗積文雄著

AUTHOR(S):

大島, 利一

---

CITATION:

大島, 利一. <批評・紹介>先秦經濟思想史論 穗積文雄著. 東洋史研究  
1943, 8(2): 122-124

ISSUE DATE:

1943-06-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145788>

RIGHT:

## 批評・紹介

### 達磨の研究

松本文三郎著

昭和十七年十月 第一書房發行

A5判三二〇頁 定價參圓

達磨を祖師と仰ぐ禪宗は、支那・日本にあつて發達し普及した、佛教諸宗の中でも第一に推されるものであり、数多い諸宗祖師の中でも、達磨ほどに廣く上下に知られてゐるものはない。而もその達磨の傳説と教義ほどに真相の曖昧なものも少い。達磨の傳記類は少いのではない。寧ろ諸宗祖師以上に多數に存し廣く知られてゐるのであるが、その大部分は史實を無視した傳説的説話的なものであり、無稽信するに足らぬものが多い。祖師の傳記に史實を無視してゐる支那禪宗の諸史籍は、また達磨禪の源流とその發展を説くことも著しく真相から離れてゐる所が多い。

松本博士がかゝる禪宗史籍傳承の達磨傳を並びに禪宗史を縱横に分析批判し、所謂「達磨禪」の源流とその發展の跡とを明示せられた快著「達磨」が公刊せられたのは實に明治四十四年であり、當時の學界に幾多の反響を起し、殊に禪宗界には少からざる問題をまき起したものであつた。その後はからずも煥然出土の古寫本中から幾多の未傳稀觀の禪宗書籍が發見せられた

結果、支那禪宗史の研究は支那の學界にも日本の學界にも頗る活況を呈し、その成果も相當に見られるに至つた。更に最近數年來は、わが思想界に禪に對する關心が急速に高まり、こゝに自ら博士の「達磨」を求むる聲も頗に高まりつゝあつた折柄、既に絶版容易に入手し難くなつてゐた本書が、今回新出資料に基く研究成果による補正を加へ、且つその後の博士の禪宗史研究の論文三篇をも添へて、新版「達磨」となつて世に送られたのである。最近十數年間に支那の胡適、わが鈴木大拙、宇井伯靜兩博士を初め諸進の諸學者によつて夫々の角度から送げられつゝある「達磨禪の研究」と共に、支那禪宗史研究者の一讀すべき好著である。（塚本善隆）

### 先秦經濟思想史論

穂積文雄著

昭和十七年三月 有斐閣發行

A5判二八六頁 定價 貳圓八拾錢

著者は京都帝大經濟學部の出身であり、現に同學部助教授の職にある人。經濟學及び經濟思想についての豊かな學識が本書のうちに窺はれるのは當然である。それが日ごろ所謂支那學畑の著書にとりまかれてゐる者に新しきを感じさせ、またいろいろと有益でもある。著者はかつて上海の同文書院にあり、その頃の勞作に歷代食貨志に關する一聯の論稿があり、京大へ移られてからも狩野、小島兩先生の教示をうけられたとのことであるから、支那學についての教養もまた充分な方と思はれる。し

か、その學風は甚だ堅實であるから、安心して讀むことができよう。今さら著者の紹介は不要かも知れないが聞くところを記しておく。

本書はかつて經濟論叢に寄せた論稿を補修して成れるもの、その要目を記せば第一章緒論に次いで、第二章から第五章まで儒・道・墨・法の諸學派の經濟思想を述べたる本論があり、第六章結論に次いで「李悝の平糶法に就いて」なる論文及び詳密な索引を附載する。

その緒論においては先秦經濟思想史の意義、方法及びその背景が詳述され、著者の用意のなみ／＼ならぬ點に敬服する。本論においては主として各學派の代表的著作についてそのうちに含まれたる經濟思想を分析論究される。例へば管子については「管子」なる書物は管仲の著はすところは考へ難いから、管子の經濟思想として論ずるものは管仲その人の經濟思想ではなくて、「管子」なる書物に見はれたるそれである如くである。しかしまた李悝の經濟思想を論ずる際には、李悝の著書と言はれるものは佚して傳はらぬから、これは斷片的資料より窺ふといふ方法をとられる。これはやゝ便宜主義的な嫌ひはあるが、これら古典の本文批評の容易ならざるを知悉される著者が、これを避けて以上のやうな方法をとられたのは、一應賢明であり堅實な學風のためでもあらうと思ふ。

それから本書を一讀して感じることは、各篇がその經濟思想を構成する要素に分析され、それが一定の構成の下に整然と叙

述されてゐることである。孔子の經濟思想を例にとれば、孔子の爲人以下、唯物論、寡欲論、均分論、節儉論、輕稅論などと頭註が記され、各學派毎に要約を附し、しかも索引において、例へば貧乏論については儒家、孔子、荀子、楊朱、墨子、管子、李悝、韓非子、マルサスの貧乏論の頁が列擧されてゐる如きその整齊ぶりはまことに稀に見るところである。しかしこれも一長一短であつて、そのために叙述は甚だ明解となるけれども、形式に捉はれれば、思惟は類型的となり易く、思想史のもつ魅力を減殺する結果となりかねないと思はれる。著者が本書において「諸子の論著に就いて經濟思想を探索、發掘、精鍊、系統化する」とともに、これを流轉の相に於て捉へその生成發展を觀「んとする優れた意圖も、系統化するといふ點では申し分はないが、「これを流轉の相に於て捉へ、その生成發展を觀する」といふ點——この點こそ思想史を成立せしめる——において、やゝ物足りなさを感じしめるのも、つまりは整ひすぎるための迫力の弱さによるものではないかと思はれる。

また著者は西歐の經濟思想に詳しく、そのため常に之を先秦のそれと比較してをられるが、このことは著者の如き士にして初めてよく成し得ることであり、近世西歐の經濟思想が先秦のそれと符節を合する如くであるといふやうなことも充分な理解と興味とを持たれるのであらうが、筆者の如く西歐の經濟思想に通ぜぬ者にとつては、實はあまり興味が持てない。そこで思ふことは他國の思想との比較といふことは、單に類似や相違

を指摘するのでは實は未だ充分ではなくて、その比較を通じて先秦の經濟思想の不明な部分をよりよく探求、發掘、精練して初めて、その比較が充分の意義を發揮するのではないかといふことである。このことは著者の如き士にして、わづかによく成し得るところであることを思ひ、望望の念切なるを覺える。

以上は曾つて讀過の際に抱いた感想の一端である。この他なほ自ら疑問として教へをうけたいこともあるが、いま編輯子の督促急に、かつ身邊の雜事に追はれて、再讀の暇なきまゝ、燕雜な讀後感をつらねて責をふさぐ。もつとも時間的に餘裕を與へられたとしても、本書の内容を批評する如きは實は筆者のよくする所ではない。著者が「みるところは同じでも、みる人が變れば、思ふところは自づから異なるなきを得まい」と言はれるところを借りて妄評を敢てなすの辯に代へたい。(大島利一)

### 支那文學藝術考

青木正 兄著

昭和十七年八月 弘文堂書房發行

A5判四七四頁圖版十五 定價五圓五拾錢

青木先生は近頃矢張り早やに本を出される。一昨年は隨筆集『江南春』を、昨年はこの論纂を、また近く『支那文學思想史』を出版されると承つてゐる。健康あまり勝れさせられぬ先生にして、かく一年に一本といふ工合に續々と著書を出される旺んな御精力には、我々たゞ嬉しくもまた驚倒するばかりである。失禮なことを言ふやうで恐縮であるが、先生の御氣質(勿論筆

者が自ら想像するものにすぎぬ)から推して、本を出すといふやうなことは餘り好まれぬかのやうに思つてゐた筆者は、先生のこの盛んな名山事業を見るに及んで、實は全く意外な感に打たれたのであつた。筆者の獨り合點はどうも間違ひだつたらしい。讀者は先生のその心意氣を此の書の序文から窺ひ知ることができよう。先生の御本領は、筆者如きが驚かうと驚くまいと頓著なく、愈々琢きがかゝり、愈々枯淡さを加へて、我々の飢渴を癒やして頂けるであらうと、近來これほど心樂しい期待はないのである。

さてこの名著を、淺學しかも疏懶な筆者如きが到底批評するなんどの資格のないことは、誰よりも先づ自分が知つてをり、では紹介といふところで逃げようにも、今さら紹介するまでもなく、本誌を讀む程の人ならば、既に御承知済みのことであらう。たゞ筆者が此の書に限らず先生の著書を一倍愛讀してゐることが事實である以上、どういふ點を「愛」讀するかに就いてなど何か一言へないでもあるまいと思ひ、自分ひとりの讀後感的なものを書き連ねる次第、獨り決めなところや、とんだ感違ひが數々あらうが、前もつて御赦しをお願いして置きたい。

先生の文章を讀むことは楽しい。勿論先生の精妙な論證や細密な考證からも、我々の啓發されるものは非常に多いが、と共に筆者の強く心奪かれるものは、土岐善麿氏の評語を借れば、「豊潤」なその文章である。嘗て『江南春』が世に出た時、そ